報　告

ニュージーランドの保育施設訪問記

――「学びの物語（Learning stories）」をめぐる旅をふりかえって――

中　西　さやか
川　端　美　穂
玉　瀬　友　美

〔抄　録〕

本稿では，筆者らが 2023 年 2 月末から 3 月初旬にかけて実施したニュージーランドでの調査について報告する。調査では，ニュージーランドで開発および実践されている保育アセスメント「学びの物語（Learning stories）」が保育現場でどのように受け止められ，実践されているのかを知るために，①保育施設の視察，②保育者へのインタビュー，③保育者研修への参加を行なった。それらを通して感じられたのは，それぞれの子どもの「良いところ」を見つけ，成長の瞬間をお祝いするようなポジティブな評価（アセスメント）観であり，その基盤には，保育者自身が余裕を持って楽しみながら保育することのできる保育文化があるということであった。

キーワード：ニュージーランド，保育アセスメント，学びの物語（Learning stories），訪問記

は　じ　め　に

ニュージーランド（以下，NZ）で考案された保育アセスメント「学びの物語」（Learning Stories；以下，LS）は，子どもの姿を肯定的に捉えることのできる方法として日本の保育現場でも広がりを見せている。筆者（中西）が LS のことを初めて知ったのは大学院生の頃であり，それ以来，LS に関する共同研究に参加したり，自分が担当する授業の中で LS を紹介したりしてきた。しかし，実際に NZ に行ったことがなく，現地で LS がどのように捉えられ，実践されているのかについての実感は薄いままであった。

そのような中，2023 年 2 月末から 3 月初旬にかけて，NZ で LS について調査する機会に恵まれた。本稿では，NZ 調査を通して感じたことを，筆者（中西）の視点から報告する。

1. ニュージーランド調査の概要

筆者らは，2018 年度から LS に関する研究を行なってきた(1)。その研究では，LS に先導的に及び新規に取組む園を比較調査し，①保育者が LS に意味を見いだしていく過程，②それを支える園内の相互作用のありよう，③保育者個人・園レベルでの試行錯誤過程と保育の特質との関わり，④それぞれの保育コミュニティにおける「学び」の捉え方，⑤NZ の実践現場における LS の受容過程と具体的成果等を明らかにし，得られた知見をもとに LS の研修プログラムを開発することを目指していた(2)。2019 年度末に NZ での調査を予定していたが，新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となり，その 3 年後にようやく実現したのが今回の調査である。

調査に参加したのは，中西，川端，玉瀬の 3 名である。それに加えて，NZ で保育者としての経験を持つ谷島直樹氏にコーディネーターおよび通訳として同行していただいた。調査の柱は①NZ の保育施設の視察，②保育者へのインタビュー，③LS に関する研修への参加の 3 つであり，これらを通して NZ における LS の実際に触れることができたと感じている。

具体的は日程と訪問先は以下の通りである。今回の調査では，NZ の北島にあるオークランドとハミルトンを訪れた。

表 1　NZ 調査の日程と訪問先

訪問日	訪問先
2 月 27 日	オークランド ・Waterview Primary School（小学校）：見学 ・Waterview Kindergarten（保育施設）：見学
2 月 28 日	ハミルトン ・Sunny Side Early Educare（保育施設） 見学 保育者へのインタビュー① 保育者研修への参加①
3 月 1 日	ハミルトン ・Sunny Side Early Educare（保育施設） 保育者へのインタビュー② 保育者研修への参加②
3 月 2 日	ハミルトン ・Pukeko Preschool Treehouse（保育施設） 見学および園長とのミーティング

調査に行く前，筆者らは LS を導入した日本の保育現場で LS がどのように受容されているのかについて検討していた[3]。その過程で，日本では LS について「子どもを信頼する」ことによって，子どもの姿が肯定的に見えてくるという子ども理解の側面に重きが置かれる傾向にあることや，「子どもの視線の先にあるもの」を見つめた応答的な保育につながるものとして意味づけられていることなどが見えてきた。このような検討を通して，筆者（中西）が感じていたのは，日本では，「子どもが学ぶプロセス」の観察や記述よりも，子ども理解の方法として LS が位置づけられているということであった。それに対して，NZ では「学びのアセスメント」である LS がどのように受け止められ実践されているのか，特に①子どもの学びがどのように分析されているのか，②LS において「学び」とはどのようなものとして捉えられているのかについて知りたいという思いを持っていた。

NZ における LS の理念や実践はさまざまな書籍や論文で紹介されており，たとえば，LS の開発者の一人であるマーガレット・カー（Carr, M.）は，乳幼児期に大切な学びの成果として，「学びの構え（learning dispositions）」（①関心を持つ，②熱中する，③困難ややったことがないことに立ち向かう，④他者とコミュニケーションをはかる，⑤自ら責任を担う）を挙げている[4]。このように，LS における「学び」の輪郭は文献から知ることができるが，実際に NZ の保育現場に足を運ぶことで，「学びのアセスメント」としての LS を実感をもって理解することができるのではないかと考え，調査に臨んだ。

以下では，NZ 調査の中で筆者（中西）にとって特に印象的だったことや感じたことを中心に報告していく。

2. 保育者研修に参加して感じたこと

筆者らは，2023 年 2 月 28 日と 3 月 1 日に，ハミルトンの保育施設（Sunny Side Early Educare）で行われた保育者研修に参加した。研修のテーマは「アセスメントの哲学としての LS：学び手のアイデンティティを形成する」であり[5]，マーガレット・カーとともに LS に関する書籍を執筆しているウェンディ・リー（Lee, W.）氏が講師を務めた。研修は，保育が終わった夕方の時間に，園で手作りされた軽食をつまみながらリラックスした雰囲気の中で始まった。司会者はおらず，講師紹介もなく，講師のタイミングでゆるやかに研修がスタートしたことが印象に残っている。

研修では，アセスメントとはどのようなプロセスなのかについて，講演および講師から参加者への問いかけを通して考察する形式がとられていた。たとえば，研修の冒頭には，リー氏から「幼児教育のアセスメントに対する見方や考え方を 1〜3 ワードで表すとしたら？」という問いかけがあった。筆者（中西）自身はこれといったワードが思い浮かばなかったが，当日のメモを見返すと「子どもの視点　children’s perspective」と「コミュニケーション

写真 1　研修の様子

communication」と書いていた。研修に参加していた保育者からいくつかのワードが発表された後，アセスメントを表すワードとしてリー氏が挙げたのは「喜び　joy」であった。アセスメントは楽しいプロセスであり，保育者と子どものウェルビーイングが育まれるものであると熱を込めて語られていたのを覚えている。その他にも，実際に作成された LS が提示され，「このストーリーの中で子どもにどのような学びがあるのか」を参加者が分析するための時間もあった。

研修に参加した保育者たちは，リー氏の問いかけについてじっくり考えたり，周囲の保育者とディスカッションしたりしながら自分なりの答えを導き出し，表現していた（そして，リー氏はどの保育者の発言に対しても「いいね」「素晴らしい」と応答していた）。一方，筆者（中西）はある程度 LS の理念や方法を理解しているつもりでいたが，リー氏からの問いかけはどれも難しく感じた。実際にリー氏から「どう思う？」と問いかけられ，「私は実際にアセスメントしていないからわからない」と答えるしかない状態であった。「でも，大学でアセスメントについて教えているでしょう？」というリー氏の返答はまさにその通りで，自分はアセスメントのことを授業で語り，研究対象にもしているが，アセスメントについての実感がないこと－アセスメントする保育者の立場に立たないとわからないことがあること－を知る機会となった。また，研修に参加していた保育者に比べて，筆者（中西）は研修のような場で自分の考えを表現すること自体に慣れていないことも痛感した。

研修の後，筆者らは谷島氏をまじえて研修内容を振り返る機会を持った。その中で印象に残ったのは，研修で触れられていた「他の保育者をジャッジしない」ことの重要性についてである。谷島氏は「自分の LS を『ちゃんと書かないといけない』と思うと書けなくなる。基準（他の人が書いた『良い』LS）に合わせようとするとオリジナリティがなくなる」と話されて

おり，「良い」LS という基準に向けて書こうという意識が，それぞれの保育者のオリジナルな LS を書くことの妨げになるということが印象的であった。LS は子どもの学びや姿についても「できる／できない」というジャッジをしないものであるが，そのような評価観は保育者自身にも適用されているのかもしれないと感じた。

3. 保育者へのインタビューを通して感じたこと

第 2 節で報告した保育者研修と同じ日に，研修が行われた園の保育者にインタビューを行なった。インタビューの対象者は，保育主任（以下，A 保育者）であり，LS にどのように取り組んでいるのかについて語っていただいた。

A 保育者はフィリピンの出身であり，元々は学校の教師としての経験を持っている。NZ で保育者となり，保育の中で一番大切にしていることは「楽しむこと have fun」であり，直接指示したり教え込んだりしないことを意識しているという。また，一人ひとり違った子どもの興味を促進する（encourage）ことも大切にしていると話されていた。

LS については，パソコンを使って書くことや，第二言語で書くことが必要であったため，A 保育者にとってチャレンジだったという。LS を書くための持続可能な方法を探り，自分なりに取り組み方をアップデートしたり簡素化したりしていったとのことだった。LS を書くことによって変化したことについては，「距離をとって子どもが何をしているかを見ることで，色んな学びを認識できるようになった」ことを挙げられていた。

インタビューを通して印象的だったのは，保育を楽しむことや，LS が子どもを知る楽しみにつながっていることなど，「楽しみ／楽しさ」を中心に語られたことであった。また，保育の評価（evaluation）は保育者のサポートのためにあり，ジャッジすると保育者が委縮したり心を閉ざしたりしてしまうという点も心に残った。A 保育者が語ったことは，研修の中でリー氏が語ったこととともリンクしており，NZ の保育の中にある程度浸透した考え方や感覚なのではないかと感じた。加えて，多様な背景を持つ保育者が活躍する NZ においては，母語以外の言語で LS 等の記録を書くことが必要になっており，その大変さを知ることができた。

4. 保育者のウェルビーイング

今回の調査全体を通して感じたのは，保育実践やアセスメントがポジティブなものとして循環している雰囲気であった。そのような雰囲気の背景には，保育者自身がある程度の余裕を持って楽しんでいることがあるのではないかと思う。谷島氏が著書の中で紹介しているように，NZ の保育施設では「保育者が幸福を感じながら働ける環境作り」や「保育者のウェルビーイング」が重視されていることを感じる場面が多々あった(6)。

NZ の乳幼児教育カリキュラムでありテ・ファーリキには，保育者のウェルビーイングについて以下のような記述がある。

> 子ども一人ひとりのウェルビーイング（心身の健康）は，カイアコ（保育者），保護者，ファーナウ（子育て応援隊）のウェルビーイング（心身の健康）と持ちつ持たれつの関係にある(7)。

このように，子どものウェルビーイングは，子どもを取り巻く大人のウェルビーイングと深く結びついているという前提のもとに，保育者のウェルビーイングが大切にされているからこそ，自分も他者もジャッジせず「喜び」や「楽しみ」としての保育アセスメントが可能になっているのではないかと考えた。

お　わ　り　に

第 1 節において，NZ 調査で特に知りたかったこととして，①子どもの学びがどのように分析されているのか，②LS において「学び」とはどのようなものとして捉えられているのかという 2 点を挙げていた。これら点について直接的な答えが得られたわけではないが，調査を振り返って感じたことをまとめておきたい。

NZ で子育てをされている村田佳奈子氏は，谷島氏へのインタビュー記事の中で，NZ の保育者は「個々の子どもの好きなことや得意なことに気が付くことが上手だなという印象」があると述べている(8)。また，同インタビューの中で，谷島氏は「種を植えると植物の芽が伸びてきて，徐々に葉っぱが一枚一枚開いていく，その葉っぱが開くような成長のシーンをとらえてお祝い（Celebrate）しているような気持ちで書くものだと思う」と LS について語っている(9)。筆者（中西）が NZ の保育施設で感じたのは，両氏が語るようなアセスメント（LS）のイメージである。保育者がそれぞれの子どもの「良いところ」を見つけ，成長の瞬間をお祝いするようなアセスメントの基盤には，保育者がリラックスし，余裕を持って保育を楽しむことのできる保育文化が息づいていることを体感した。そのような文化の中でこそ，LS はうまく機能しているという印象を受けた。調査前は，「学びとは何か」ということにこだわりを持って LS のことを考えていたが，NZ の保育文化や保育者たちの雰囲気に触れてみて，必ずしも「学び」を突き詰めて考える必要はないのかもしれないとも感じた。

その他にも，NZ の保育や LS に関する文献を通して，これまで頭で理解していた事柄や言葉（たとえば「コミュニティ」など）を「こういうことか！」と腑に落ちる瞬間が何度もあった。月並みな感想ではあるが，実際に現地に足を運んで初めてわかることがあると思った。

NZ から帰国してからしばらくの間，筆者はこれまでになくポジティブな気持ちで過ごして

いた。久しぶりの海外で刺激を受けたこともあるが，NZ のポジティブな空気に触れた余韻だったのではないかと思っている。

〔注〕

(1) JSPS 科研費　基盤研究（B）18H00993「アセスメント『学びの物語』における個と共同体の試行錯誤過程と研修プログラム開発」研究代表者：川端美穂.

(2) 前掲(1)2018 年度実績報告書.

(3) 二井仁美・中西さやか・川端美穂・玉瀬友美・木村彰子（2021）「ニュージーランドの保育アセスメント『学びの物語』の受容に関する一考察①－日本の保育現場に着目して－」日本保育学会第 74 回大会発表資料.

(4) マーガレット・カー（2013）『保育の場で子どもの学びをアセスメントする：「学びの物語」アプローチの理論と実践』（大宮勇雄・鈴木佐喜子訳）ひとなる書房.

(5) 2023 年 2 月 28 日 研 修 資 料 “Learning Stories a philosophy of assessment: building learner identities”.

(6) 谷島直樹（2022）『ニュージーランドの保育園で働いてみた：子ども主体・多文化共生・保育者のウェルビーイング体験記』ひとなる書房，179-221.

(7) 大橋節子・中原朋生・内田伸子・上田敏丈監訳・編著，神代典子訳（2021）『ニュージーランド乳幼児教育カリキュラム　テ・ファーリキ（完全翻訳・解説）：子どもが輝く保育・教育のひみつを探る』建帛社，31.

(8) 村田佳奈子（2023）「【ニュージーランド子育て・教育便り】第 44 回　保育士に聞く（1）：子どもの好きなことから成長に繋げる－保育士の姿勢とラーニングストーリー－」Child Research Net（https://www.blog.crn.or.jp/report/09/471.html）2023 年 11 月 4 日閲覧

(9) 前掲(8).

〔謝辞〕

今回の NZ 調査でお世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。

（なかにし　さやか　社会福祉学科）
（かわばた　みほ　北海道教育大学）
（たませ　ゆみ　高知大学）

2023 年 11 月 15 日受理